展望

“夏虫”の想い

小久見善八

関西支部は不破の関から西、近畿から山口を除く中国・四国地方を含む広い地域にわたるが、地政学的に見ると合理的な範囲である。この地域は電気化学の重要な部分である電解、電池に関する産業の発展過程では重要な位置を占めてきた。半導体のようなドライプロセスに弱く、化学、繊維をはじめとするウエットな産業に強かったが、産業構造の変化とともに、関西の地盤沈下が言われており、電気化学の分野でもそれが当てはまる。電解産業は勿論のこと、電池に関しても関西の比重がずいぶんと下がっている。電気化学分野の研究においても関西の地盤沈下は顕著で、大学に身をおくものとしては何とか活性化の方策を考えなければいけないと痛感している。東京中心に動くのは必然の流れであるが、地方は常に発展と変革の活力の供給源であってきただけでなく歴史的事実である。オリジナリティーのある情報の発信と変革に結びつく製品・プロセスの開発に努めるべき支部の責任は重いと感じている。

関西再浮揚の切り札として大阪オリンピックの誘致に動くことも良いが、コンピューター画面に毒されていない人材の養成から始める地道な努力も必要である。思い起こすと、関西支部には夏に若手が泊まり込んで議論を交わし、羽目を外して騒ぐ合宿があった。関西支部のみならず、関東支部の50歳前後から60歳前までの方にはこれに参加されたことがある方々も多い。今もこの会は続いているが、発足当初のような活性はない。それに代わって、本部からも援助をいただき、金を出すが出さないとの条件で支部からも幾ばくかの補助を出している若手の勉強会が徐々に活性化しつつあるように感じている。

我が国産業はオイルショックによって大きな痛手を受け、電気化学関連産業も甚大な打撃を受けた。大学を卒業・修了しても就職がままならなかったことが思い出される。そのために博士課程に進学し、研究者の道を選んだ学生も多かったはずである。にも拘わらず、関西にはこの年代とその下の40歳前後までの電気化学の研究者が比較的少ない。全国的にもそうなのではないだろうか。オイルショックの頃に不本意な職に就いた人が最近になってベンチャー企業を起こす例が多く見られると聞いたことがある。電気化学の分野でも、このような人材が現れることが望まれるが、若手を着実に養成する事を第一とするべきであろう。今、産業界は不況にあえぎ、なかでも化学産業は苦境に直面している。エネルギーと環境に関わる電気化学関連の分野はいくらか明るい状況ではあるが、このような時期こそ人材育成の好機として捉え、生命、エネルギー、環境など人類の前に立ちはだかる基本的な課題に対処できる電気化学の分野の優秀な広い視野を持った人材を育てることに努めなければならないと自戒している。

Zempachi OGUMI
関西支部長、京都大学大学院工学研究科教授